

一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

英語のネイチャー (Nature) という言葉が欧米から入ってきたとき、これをどう訳すかについて、日本人はひどく困惑したという。

英語の「ネイチャー」は、人間という絶対的な存在とは区別される対象である。ところが、日本古来の考え方では、人間も「ネイチャー」の一部である。人間を除外した「ネイチャー」という概念は、日本には存在しなかった。これを曲げて、仕方なく「自然」という言葉をあてたのだが、もともとこの言葉は副詞で、その頃の日本語では「自然に」という形でしか使われていなかった。

「私」が確立しているとき、たとえば「私」が花を見て、「ああ、花という自然がある」と感じる。これは西洋の見方だ。ところが、それまでの日本では「私も花も、自然に生きている」という使い方、考え方がなかった。「自ずから然る」。そこには人間も含まれていたのだが、その「自然」を「ネイチャー」の訳語にあててしまったので、その後日本人は混乱するのである。「自然に」というときは昔風に使っているのだが、「自然観察」というときには欧米的価値観の「自然」になってしまふ。

自然をかたちづくる、その生成の根本を超自然的なものだと考えた場合、世界のすべては自然の中に包含されるだろう。そこでは神と人間、自然の区別がない。花のなかに神を見ることもあるし、人間に神を見てもいい。ところが、キリスト教の場合、自然を創ったのは「神」という自然の外にある存在なのである。神がいて、人間がいて、自然がある。それらは歴然と区別されているのだ。

さらにキリスト教の場合、神でありながら人間の姿をしている「キリスト」の存りようが問題となる。イスラム教にはアッラーという神は存在するが、偶像崇拜を禁じているので、その神の姿は描くことができない。神は区別されているが、あとは人間も自然もみな一緒に、キリスト教のように神と自然の間に人間が入っていたりはしない。だから、神の座に人間が迫るようなことは起こり得ない。イスラムは、その戒律の厳しさでは異なるが、自然と人間の距離という点では、東洋の考え方にとても近いのである。

ヨーロッパのキリスト教では、間に人間が入ってきたまではよかったが、その後、その図式はスライドし、神の代わりに人間がするようになっていく。神の意のままではなく、人間の意のままにした方がうまくいくんじゃないか。そんな方向に進んでいくのである。

こういった考え方は、キリスト教特有のものだ。この延長線上に、自然科学が明確な形で打ち出されてくる。「人間と自然は異なる存在で、人間が自然を客観的に観察・考察する」という自然科学の考え方は、「神がこの世を創りたもうた」という論理とよく似ている。「神と世界」を「人間と自然」に置き換えているのだ。その後、人間はこうして生まれた科学技術によって「進歩」していくことになる。

科学は人間に恩恵を与えたが、その過剰な「進歩」は、人の心を不安にさせ、ついには地球自体を破滅に導く

可能性すら出てきている。ゆえに現代を生きる人々は、自然との距離を見直そうとしているのである。

(河合 隼雄 『ケルトを巡る旅』より)

問一 傍線部ア・イの熟語の漢字四つを用いて、それぞれ熟語を作りなさい。(漢字の位置は上でも下でもよい。)

(例) 除外 ↓ 排除・外国

問二 二重傍線部 a 「曲げて」と同じ意味で「曲」が用いられている熟語を次から選び、記号で答えなさい。

- ア 曲芸 イ 曲解 ウ 委曲 エ 編曲

問三 波線部①「欧米的価値観の『自然』」と同じ内容を表す部分を文中から二十字で抜き出しなさい。

問四 次の文中の空欄 A・B にそれぞれ適切な内容を入れ、筆者の科学に対する考えをまとめた文を完成させなさい。

科学の進歩によって人間は A が、進歩しすぎたことによって B ようになった。

問五 次の中で、筆者の記した内容とあっているものには○、違っているものには×をつけなさい。

- ア 日本では昔から「私」が確立していた。
- イ キリスト教では、人と自然は区別されている。
- ウ イスラム教では、神と人間と自然が一体化している。
- エ 自然科学は、人間が自然と一体化しているところから生まれた。
- オ 科学は地球を破滅させるものだ。

問六 波線部②「自然との距離を見直そうとしている」とは、どういう方向に考え方を変えようとしているのか説明しなさい。

二、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

父は五十八歳のとき近所の知人にスズめられて俳句を作るようになった。それがどういう **A** の吹きまわしだったかは知らない。本を読むこと、とりわけ内外の小説を読むことは好きだったが、特に俳句が好きということとはなかったはずだった。やはり一種の気まぐれだったのだろうか。

その父は俳句を作る際に五十八という俳号を用いた。理由はいたって単純なもので、句作りを始めたのがその年齢だったからというのである。だが、もちろん、五十八は「こじゅうはち」ではなく「いそはち」と読ませる。

五十八歳のときに始めたから五十八と号する。その単純さの中には、父独特のダンディズムがあったのは間違いない。俳句はやはり遊びである。確かに、場合によっては遊び以上のものがまわりついてしまうかもしれない。しかし、それは目指すべきものではなく結果としてでしかない。その俳句という遊びに、大仰な名前をつけるのは少々恥ずかしくないか。直接聞いたわけではないが、父が五十八という名前を俳号に選んだのは、恐らくそういった心の動きからだろうと思ふ。父はわざとらしいものや大袈裟なものが嫌いだった。そんな父にとつて、妙に気取った俳号などどういつける気がしないものだったろう。

俳句を始めたものの、さほど勤勉な作り手では **I**。ガリ版刷りの句誌に毎月五句ほど投句することと、たまに句会に参加して何句かを作るといふ以外のことをしていなかったから、俳句作りに明け暮れているといった印象はまるで **I**。当時大学生だった私は、父がどのような句を作っているかについてほとんど関心が **I**。そもそも、俳句という詩形に興味を持てなかったのだ。

やがて父は、六十五歳になったときにふつりと作句をやめてしまった。その頃すでに家を出ていた私は、久しぶりに会った際に理由を訊ねてみた。大学生の時分とは違い、すでに雑誌などに文章を発表しはじめていた私 ^③は、いくら素人の趣味でいどのものだったとはいえ、一つのジャンルの創作に **B** を染めながら途中でやめてしまうという心理に興味があったのだ。それに、父の作った句のいくつかを眼にして、「ほおつ」と思われることが何度かあったのも理由のひとつだった。このまま作りつづけていけばかなりのものができているのではあるまいか。 ^④ミヅチとしての **④**もあつたらうが、そんなことを思わないでもなかった。

どうして作句をやめたのか。訊ねると、父はおよそ次のようなことを言った。俳句というのは、溢れるものをあの短い詩形に押し込めるために無理をする。押し潰し、削ぎ落とす。だが、その無理をすることで、逆に **a** になってしまふものがある。歳をとるにつれて、その **a** さが鬱陶しく思えるようになって

しまったのだ、と。

以後、たったひとつの句も作ることはなかった。私はどこかで惜しいなと思っていたが、他方でそれが父なのだとも思っていた。確かに **II** い。しかし、創作には、そうした **II** さとは別の執着心が必要なはずだった。そこで「**II** く」見切らずに、もう少し悪戦を続けていたら、かなり違うものを生み出せたかもしれない。しかし、続けること、続けられるということ、それがもうすでにひとつの **b** なのだ。父にはたぶんそれがなかった。

(沢木 耕太郎 『無名』より)

問一 傍線部①・④のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問二 傍線部②・③を何と読むか、その読みをひらがなで書きなさい。

問三 空欄A・Bにそれぞれあてはまる漢字一字を書きなさい。

問四 空欄Iにあてはまる、ひらがな四字の一文節を書きなさい。

問五 二重傍線部にある「父のダンディズム」とは具体的にどういうものか。「俳句は」ではじめて、句誌点を含む四十字以内で答えなさい。

問六 空欄a・bにそれぞれあてはまる、漢字二字の熟語を書きなさい。

問七 空欄IIにあてはまる漢字一字を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 美
- イ 酷
- ウ 潔
- エ 清
- オ 強